

現地教育施設との交流を通して

前パリ日本人学校 教諭

佐賀県唐津市立鏡山小学校 教諭 峰 慎一郎

キーワード：現地理解、現地校訪問と現地校受け入れ

1. はじめに

パリ日本人学校は、パリから20kmほど南西のイブリース県・モンティニー市に位置する。モンティニー市は、パリ市の人口増加に対応するためにつくられた計画都市で、緑豊かな近代的な町である。モンティニー市には、鉄道の駅やオートルート（高速道路）のインターチェンジがあり、交通の便が良く、自然が多く人々が住みよいようにたくさんの工夫が見られる町である。

ここに、通う児童生徒は約220名で、約95パーセントがパリ市内からスクールバスに乗り30分かけて通学をしている。放課後の子ども達は、ほとんど自宅や友人宅で過ごしている。公園や買い物など外出するには、保護者同伴でなければいけない治安状態である。したがって現地校に通うか、現地の文化・スポーツ活動に参加しない限りは、同世代の現地の子どもの交流はほとんどない。

本校では、「自国の文化を大切にするとともに、他国文化について興味を持って積極的に吸収していこうとする能力・態度を育成する」を国際理解教育のねらいとして、総合的な学習の時間や現地校交流、社会見学を進めてきている。現地校交流の相手校は、モンティニー市の社会教育施設であるマネ・センター校とポールフォー校である。（6年目にあたる）6月に、訪問受け入れの希望日を事務官を通して市の担当部署に連絡を取り、9月の中旬に交流日が決定する。現地校交流・受け入れには、事務官が通訳としてつきそう。

以下は、小学部2年生の現地校交流の実践である。

2. 実際の交流活動

(1) 交流先

平成19年度は、モンティニー市の社会教育施設マネセンターへ通うCE1（2年生）との交流を行った。ここは、学校が休日である水曜と学校が終わった時間（放課後）にのみ開いている施設で、勉強をする場所というよりも現地の子ども達同士がコミュニケーションを行いながら楽しく過ごす場所である。フランスの学校は、月・火・木・金で技能教科（体育、図工、音楽）はカリキュラムに入っていない。そこで、それらの教科を補うために各自で学習する日が、水曜日と土曜日というわけである。子ども達は、親と相談して地域の施設に通ったり、習い事をするようにする。また、学校がある日の放課後に、親が仕事をしていて子どもを見ることのできない家庭のために、この「マネセンター」は利用されていて、ここで学習（宿題も含む）したり、運動したりする。

この「マネセンター」には、昼間は週に1回、あとは月・火・木・金の夕方にしか子どもたちが通ってこないが、とても素晴らしい設備である。幼稚園から小6までの年齢の子ども達が、それぞれ一軒の家のような建物で活動できるようになっており、一軒の家には教室が2つ（2つの学年）で真ん中にトイレがある。それぞれの建物は離れていて、その建物の周りには、サッカーやバスケットが十分にできるスペースがいくつもある（敷地がとても広いので、教室棟とは別に、食堂やホールとよばれる室内活動場所もある。）施設利用の費用は所得によって分けられており、低所得者でも同じように施設が利用できるようなシステムになっている。

(2) 交流のめあて

- フランスの現地校の児童と仲良く遊んだり、一緒に活動したりすることを通して、人権尊重の精神を培い、相互の文化理解を深める。
- 簡単なフランス語を使って挨拶や会話をすることで、日頃の学習の成果を生かし、コミュニケーション能力の育成を図る。
- フランスの子どもたちに日本文化を伝えることで、日本理解を深める。

(3) 交流までの準備

- フランス語会話能力にはかなり個人差があるので、簡単な挨拶や会話ができるように交流のしおりを準備し練習を行う。
- フランス語で話す挨拶や日本文化を紹介するための説明や準備。

(4) 交流活動内容

① マネセンター訪問（現地の学校主体）

- (日程)
- 10:00 始めの会（挨拶・プレゼント渡し）
 - 10:10 交流活動
 - 11:30 カンティーン（給食）
 - 12:30 終わりの会

(活動内容)

始めの会では、交流を機会に会えた喜びと一緒に活動できる期待など、今日まで楽しみにしていたことをフランス語で伝え、日本の文化を知ってもらうための土産を渡した。土産の名前と遊び方を説明してみせた。

交流活動では、学級の子どもを二つのグループに分かれ、フランスの子どもと日本人学校の子どもと一緒に活動した。前半と後半に分かれ二つの活動を行った。一つ目は、ペタンク（木製の目標球（ビュット）に金属製のボール（ブル）を投げ合って、相手より近づけることで得点を競うスポーツ）。もう一つは、クリスマスの飾り作り（モールや色ペン等を使って）を行った。現地の子ども達と一緒に活動をする中でコミュニケーションをとり一緒に活動を楽しむことができた。

カンティーン（給食）では、現地の子ども達の給食と同じものを一緒に食べた。フランスパン、羊の肉、ポテトチップス・クスクス・デザートチーズ。机ごとにまとめて置かれるので、自分が食べる分だけとれるようになっていた。

終わりの会では、楽しかった活動の感想と次回の訪問を楽しみにしていることを伝え、現地の子ども達の感想を聞いた。

② マネセンター来校（日本人学校主体）

- (日程)
- 10:00 はじめの会
 - 10:20 おやつタイム
 - 10:40 交流活動①
 - 11:30 学校紹介
 - 12:00 昼食
 - 12:30 交流活動②
 - 13:00 写真撮影・終わりの会・見送り

(活動内容)



始めの会では、久しぶりの再会を喜び、とても楽しみにしていたことを伝え、練習したフランス語の歌を歌った。現地の子どもも知っている歌だったので、一緒に歌ってくれた。一緒に歌えたことで、緊張もほぐれた。

おやつタイムでは、現地の子ども達が好きなのや日本のお菓子を一緒に食べた。チョコレートやポテトチップスは、とても人気があった。日本の煎餅も、現地の子ども達に人気があり、おいしそうに食べていた。

学校の施設紹介では、グループごとに日本人学校の授業風景や施設を見学した。事前に準備したしおりを使って各教室を説明した。フランス語の授業や生活科で練習していた成果を十分発揮できた。

昼食では、日本人学校の子ども達は、いつもの家からもってきた弁当を食べ、現地の子ども達は、現地の教育施設で作ってもらった持ち込みのカンティーン（サンドイッチ・トマト・チーズ・ポテトチップス）。現地の子ども達は、お弁当をじっくりと観察している子どもが多かった。

交流活動では、しおりを使っての自己紹介や日本の遊びの紹介を行った。相手の名前を聞き、カタカナとアルファベットを使って名札を書き、お互いの胸につけて活動を行った。日本の遊びでは、折り紙・はねつき、こままわし、剣玉などを行った。グループごとに、遊び方を身振り手振りや簡単なフランス語で説明を行った。現地の子ども達は、すぐにはうまくできななかったが、日本人学校の子ども達と楽しく遊ぶことができるようになった。折り紙で作ったもの（鶴や手裏剣、飛行機）などは、プレゼントした。現地の子どもはとても喜んでいて。

終わりの会では、日本の文化を味わったことと訪問のお礼を言った。また、これからの現地の子ども達が参加できる活動（日本人学校祭り・体験入学など）にもぜひ来て欲しいことなどを伝え、再会に期待した。最後にみんなでアーチを作り、現地の子ども達を見送った。

3. 交流活動の感想と今後の課題

下見では、国際理解部員と一年目派遣教員、事務官で行った。往復のバスルートや交流する施設の見学を行い、今までの行ってきた活動内容や現地の子ども達の様子など聞いた。施設には、今までの交流での土産を飾っており、施設で働く人もとても友好的であった。

事前に交流のしおりをつくり、フランス語や生活科の時間を使って簡単な挨拶や会話の練習を行った。自宅学習として家族と練習してくる子ども達も多かった。

始めの言葉は、フランス語で大きな声でわかりやすく話をするのができた。交流が始まった直後では、少しとまどいもあったが、交流を進める中で仏語の授業を思い出したり、しおりを見て話したりして少しずつ交流が深まっていた。活動を通して現地の子どもと友だちになることができた。

受け入れでは、訪問で仲良くなった友だちが来るので、久しぶりの再会に準備にも熱が入った。しおりを使っての自己紹介や名札作りを最初に行ったことでグループごとに親しみがわき、その後の交流も名前を呼び合って楽しく活動することができた。日本の遊びを紹介するために、事前に担当を決め練習を行ったので、現地の友達に遊び方を紹介でき自信をもった子どもたちも多かった。

交流を通して、フランス語を実践することができた。事前の準備で、充実した活動になった。

お互いの文化や生活習慣、フランス語の微妙なニュアンスの違いなどで少しづれがでてくるときもあったが、それを理解するようにして、お互いにうまく進めていくことができた。しおりに遊びや食べ物など好きなものなどの細かい表現や単語をもっと増やすことで現地校の子ども達との交流がもっと深まっていけると考え、次年度の国際理解部で取り組み、しおりに追加で載せた。

以前、交流にきていた現地の子ども達からは、交流の中でいくつかの日本語がでてきたり、現地で紙飛行機を使って遊ぶ子もいたりして、地域の中で日本文化に親しもうとする面もでてきていた。

言葉はうまく通じなくても、心と心で感じ合えば、お互いにいろいろなことが伝わっていくことを感じた。子ども達が現地との交流の中で感じたこと、思ったことを、これからの生活の中で生かして欲しい。